

2022 AC

1st. Celebrate Sukkot

原語で味わう創世記第1章

集中特別講座 10/9~16

10日(夜) No.3

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

①ヨハネの福音書5章39節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証ししているものです。

【新改訳2017】

②イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

※聖書のシナリオライターは時間と空間に支配されない永遠の神です。シナリオが歴史の中に突入する時、その初めと終わりが規定されることは当然のことです。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

③イザヤ書34章16節

【主】の書物を調べて読め。
これらのもののうち、どれも失われていない。
それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。
それは、主の口がこれを命じ、
主の御霊がこれらを集めたからである。

※「自分の伴侶」にたとえられているのは、神のみことばの証言が必ず伴侶のように置かれているということの意味します。例えば、「千年」「十四万四千人」など。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

●創世記1章に関する注解書は多く書かれていますが、その多くが宇宙(地球)の始まりと考えています。しかしアシュレークラスでは、創世記1章を「**神の永遠のご計画の全貌が啓示されている章**」という視点で学んで行きます。

【新改訳2017】ヘブル人への手紙 4章12節

神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、**たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。**

●私たちが持っている「理解の型紙」(この世の知恵、常識、教理)という眼鏡を外して、霊を働かせることが不可欠です(Ⅱコリ5:16, 3:6)。私たちの霊の目が開かれるよう、シエーム・イエシュアの名を呼びつつ、学んで行きたいと思います。

1. 前回の復習 ①

● 前回は、神が最も関心を持っておられる「地」(「ハーアーレツ」 ארץ)が「茫漠として何もなかった」ことを学びました。そしてそのイメージは哀歌の中によく表されていることを学びました。つまり、イスラエルが歴史の中で経験した事実が背景となっているということです。時系列で物事を考えると腑に落ちませんが、聖書は時空間を超えた神が書かせたものです。聖書のシナリオライターは神ご自身なのです。

● 「地が茫漠として何もない」(トーフー・ヴァーヴォーフー)状態は、バビロン捕囚以後としては、A.D.70年のローマによるエルサレム崩壊とユダヤ人の世界離散、および、終わりの日のメシア再臨前に反キリストが支配する際にも現わされます。「わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ」(イザヤ46:10)という神のことばが、まさにこのことを裏付けています。

1. 前回の復習 ②

●3節に入る前に、「闇」が「大水」の上を覆っていたということに目を留めたいと思います。「大水」と訳された「テホーム」(תְּהוֹמֹת)とは何でしょうか。Jeff A. Benner訳のHebrew New Testamentでは、ローマ書11章33節「神の知恵と知識の富」の「富」を「テホーム」と訳しています。このことから、2節の「闇が大水の面の上にあり」を「**神の知恵と知識の富が闇で覆われてしまっている状態**」と理解します。「神の霊がその水の面を動いていた」の「その水」という冠詞付きの「水」も、神のことばを示す「大水」の一部と理解します。

●2節にある闇のただ中から、神は「光」(「オール」אֵל)を呼び出されます。これが今回取り上げる3節の重要な主題です。「光」が呼び出された目的は何でしょうか。それは、「その地」(אֶרֶץ)を照らすためであったことは明らかです。

2. 「闇の中から呼び出された光」 ①

【新改訳2017】創世記1章3節

神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。

オール ヴアイエヒー オール イエヒー エローヒーム ヴアヨーメル

וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים יְהִי אוֹר וַיְהִי אוֹר׃

光が するとあった 「光が あるように」 神は すると仰せられた
ヴァウ継続法未完了

(「イエヒー」 יהי is 「ハーヤー」 יהיה の未完了短縮形) (2節が完了形なので意味はそのまま)
※未完了短縮形の「指示形」「要求形」「希求形」とも呼ばれます。

- 3節の「光」(「オール」 אוֹר) は光源としての光ではなく、人間の目には本来見ることのできない「光」であり、単数形の光です。※ヤコブの手紙1章17節には「光を造られた父」とあります。原文は「数々の光の父」です。創世記1章3節の「光」ではありません。
- 「天からの光」に照らされたパウロが、聖書の「光」の概念についてどのように解釈し、理解したのでしょうか。パウロはⅡコリント書4章6節で、創世記1章3節を「闇の中から光が輝き出よ」(新改訳2017)「闇から光が照り出でよ」(聖書協会共同訳)と解釈しています。つまり「闇の中から呼び出された光」としています。パウロは「神の言を完成するため」に神から選ばれた人です(回復訳/コロ1:25~26)。

2. 「闇の中から呼び出された光」 ②

● 「天からの光」によってキリストを知ったパウロの証しを、ルカは三度も使徒の働きの中で記しています。

①【新改訳2017】使徒の働き9章3～5節

3・・・サウロが道を進んでダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。

4 彼は地に倒れて、自分に語りかける声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」

5 彼が「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。

「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」

②【新改訳2017】使徒の働き22章6～8節

6 私が道を進んで、真昼ごろダマスコの近くまで来たとき、突然、天からのまばゆい光が私の周りを照らしました。 7 私は地に倒れ、私に語りかける声を聞きました。

『サウロ、サウロ、どうしてわたしを迫害するのか。』

8 私が答えて、『主よ、あなたはどなたですか』と言うと、その方は私に言われました。

『わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである。』

2. 「闇の中から呼び出された光」 ③

③ 【新改訳2017】 使徒の働き26章13～18節

13 その途中のこと、王様、真昼に私は**天からの光**を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と私に同行していた者たちの周りを照らしました。

14 私たちはみな地に倒れましたが、そのとき私は、ヘブル語で自分に語りかける声を聞きました。『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。とげの付いた棒を蹴るのは、あなたには痛い。』

15 私が『主よ、あなたはどなたですか』と言うと、主はこう言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』

16 起き上がって自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たことや、わたしがあなたに示そうとしていることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。17 わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのところに遣わす。

18 それは彼らの目を開いて、**闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ**、こうしてわたしを信じる信仰によって、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかるためである。』

2. 「闇の中から呼び出された光」 ④

●パウロは「**天からの光**」「**天からのまばゆい光**」によって目が開かれ、イエシュアがメシアであることを知ったのです。三日間の暗闇の後、目から鱗のような物が落ちたとき、彼は自分が迫害してきたイエシュアこそメシアであることを知り、それまで知っていた聖書を全く新しい視点(神の観点)から受け取ったのです。このことが、パウロに全く新しい霊的な転機をもたらしました。

●パウロはこの「光」を「闇の中から輝き出された光」(Ⅱコリント4:6)と言っただけでなく、世界の基が据えられる前から定められた(秘められた)神のご計画とみこころ、みむねと目的を意味するものであることを悟ったのです。パウロはこれを「御国の福音」として、神のご計画を余すところなく(=ひるむことなく、退けることなく)宣べ伝えたのです(使徒20:27)。

2. 「闇の中から呼び出された光」 ⑤

●ヨハネは、天からの光であるイエシュアを「すべての人を照らすまことの光」(1:9)としました。この人を照らす光こそ、人にいのちを与えるものなのです。

●ヨハネの福音書において「いのち」と「光」は密接な関係にあります。つまりイエシュアがおられるところには「いのち」があり、「光」があるのです。

●イエシュアの型となったダビデも「主は私の光・・主は私のいのちの砦」と告白しています(詩篇27:1)。「いのち」と「光」は同義なのです。

●創世記1章3節の「呼び出された光」とは「いのち」(永遠のいのち=救い)をもたらす「光」(神のご計画、みこころ、みむね、目的)とも言えるのです。

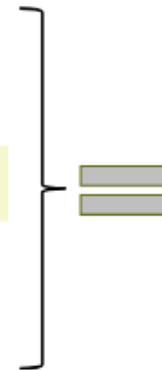
3. 「光の概念」 ①

- 使徒パウロはダマスコ途上で「天からの光」の照らしを受けたことで、「光」の概念を悟り、そのことをエペソ人への手紙1章3～14節で語っています。そこには「光」という語彙は使われていませんが、ヘブル的パラレリズムによって言い換えられているのです。
- 創世記1章3節の「光」(オール)の概念を一言で表すのは困難です。そこには、神の「ご計画」と「みこころ」と「みむね」と「目的」などが含まれているからです。しかもそれは「世界の基が据えられる前から」「あらかじめ定められていた」ものです。それらはすべてイエシュアによって実現・成就する「御国の福音」の奥義です。パウロはこれを悟り、そして語ったのです。

「あらかじめ定められていた」

「隠された神の奥義」「みこころ」「みむね」「ご計画」「目的」

「御国の福音」



3. 「光の概念」 ②

『ヘブルの修辞法』について

●このように、ある一つの言葉を別の言葉に言い換えて表現するという「**パラレリズム**」(並行法)について述べておきたいと思います。これはヘブル特有の修辞法です。キリスト教の歴史において、詩篇の中にこのパラレリズムがあることが発見され、その重要性に気づいたのは18 世紀半ばになってからのことだと言われています。

●しかもこの「パラレリズム」は単なる文節の域を越えて、旧約思想の本質を提示するために不可欠な修辞法だということです。旧約のみならず、新約にあるユダヤ人が書いた福音書、そして手紙の中にもその修辞法が多く用いられているのです。特に使徒パウロの手紙はそれが顕著です。パウロはこの「言い換え」(パラレリズム)の達人とも言えます。この修辞法は、事柄の本質をよく理解した者でなければ使えない技法なのです。例えば「神のことば」 = 「水」 = 「神・人」

3. 「光の概念」 ③

【新改訳2017】 エペソ人への手紙1章3～14節

A

- 3 私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちに祝福してくださいました。
- 4 すなわち神は、**世界の基が据えられる前から**、この方において私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。
- 5 神は、**みこころの良しとするところにしたがって**、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、**愛をもってあらかじめ定めておられました**。
- 6 それは、神がその愛する方において私たちに与えてくださった恵みの栄光が、**ほめたたえられるためです**。

3. 「光の概念」 ④

B

- 7 このキリストにあって、私たちはその血による贖い、背きの罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。
- 8 この恵みを、神はあらゆる知恵と思慮をもって私たちの上にあふれさせ、
- 9 みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。その奥義とは、キリストにあって神があらかじめお立てになったみむねにしたがい、
- 10 時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。
- 11 またキリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。すべてをみこころによる計画のままに行う方の目的にしたがい、あらかじめそのように定められていたのです。
- 12 それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。

「奥義」(תּוֹבָא), 「計画」(הַצִּבּוּרִים), 「みこころ」(רַחֲמִים), 「みむね」(רְצוֹן), 「目的」(מַטְוֵה)

3. 「光の概念」 ⑤

【新改訳2017】 エペソ人への手紙1章3～14節

C

13 このキリストにあって、あなたがたもまた、真理のことは、あなたがたの救いの福音を聞いてそれを信じたことにより、約束の聖霊によって証印を押されました。

14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。このことは、私たちが贖われて神のものとされ、**神の栄光がほめたたえられるためです。**

●句点は「神の栄光がほめたたえられるためです」の後に置かれています。主動詞は「～です」(「エイミ」εἶμι)で、その間のすべては分詞でつながっています。つまり3～14節は三つの文から成っているということになります。

●ここでは「神の恵みの福音」と「御国の福音」について語っていることは明らかです。「**世界の基が据えられる前から**」「**あらかじめ定めておられた**」**神のご計画とみこころ、みむねと目的**について語られており、**これが光の概念です。**

3. 「光の概念」 ⑥

●創世記1章3節の「『光、あれ。』すると光があった。」という「光」は、神が御子を通して、(世界の基が据えられる前から)「あらかじめ定められていた」神ご自身の緻密なご計画、深淵なみこころ(善)、そして神のみむね(喜び)と目的を含んだ「測り知れない重い事柄」を包含した「光」なのです。しかも、この光は「人の心に思い浮かんだことがないもの」(Iコリント2:9)です。とすれば、それは「奥義のうちにある、隠された神の知恵」(Iコリント2:7)とも言えるのです。つまり、光の概念は複合的な意味を持っているのです。

●ウイットネス・リーは「神の永遠のご計画」のことを「神のエコノミー(経綸)」と表現しました。これはどういうことでしょうか。Iテモテ1章4節にあるギリシア語の「オイコノミア」(οἰκονομία)をそのように訳したのです。これは「家のマネージメント」を意味する語彙で、神の家の「行政、管理、統治、按配、分配」を含んでいます。リー自身は「神のエコノミー」を「神ご自身を人に分け与える神のご計画にほかならない」と定義しています。これは「光の概念」の具体的な分与の面(手順)を強調した定義と言えます。

3. 「光の概念」 ⑦

●使徒パウロはエペソ人への手紙1章で光の概念について語りましたが、そのエペソの聖徒たちに「**あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主によって光となりました。光の子どもとして歩みなさい。**」(エペソ5:8)とも語っています。

●ここでの「光の子ども」とは「明るく、元気で、生き活きと」という意味ではありません。「光の子ども」とは暗やみの中から輝き出された光、すなわち、神の永遠のご計画(みこころ、みむね、目的)を悟った者のことです。単に自分が闇の中から救われたことを証しするだけでなく、神のご計画全体を聖書を通して論証することでもあります。これが「光の子どもとして歩む」ことの意味です。

●イスラエルに対しても同様のことが語られています(=マタイ24:14で成就)
【新改訳2017】イザヤ書60章1~3節

1 「起きよ。輝け。まことに、あなたの光が来る。【主】の栄光があなたの上に輝く。

2 見よ、闇が地をおおっている。暗黒が諸国の民を。

しかし、あなたの上には【主】が輝き、主の栄光があなたの上に現れる。

3 国々はあなたの光のうちを歩み、王たちはあなたの輝きに照らされて歩む。

今回のまとめ ①

● 聖書は「光の概念」で理解する必要があります。それはイスラエルに対する神のご計画というフレームによって理解するという事です。つまりイスラエルの民の歴史的出来事には、神のご計画とみこころ、みむねと目的を啓示する「型」が啓示されています。私たちが認めようが認めまいが、聖書全体はまず「イスラエルありき」なのです。イスラエルを基軸とすることで、聖書の初めから終わりまでのすべてが筋の通った話となってくるのです。創世記1章はそのことが隠された形で集約されていると言えるのです。

● 神は「あらかじめ定められたご計画と目的を完全に実現することのできる方」です。創世記22章の「アブラハムに対する信仰の試練」を通して啓示されたことが何かを思い起こすべきです。アブラハムはモリヤの山(モリヤ=主が示される地=エルサレム)を「アドナイ・イルエ」(יהוה ירושלים)と名づけました。それは「主がご覧になっている」という意味です。主はその地に常に関心を持っておられるということです。主が関心を持っておられることに、私たちも関心を持つことこそが、神を愛することではないでしょうか。

今回のまとめ ②

● 「光の概念」を神のご計画とみどころ、みむねと目的を示すものだと定義しました。しかしそれは外面的(粹的なもの)です。それに対してヨハネが示す「光」の概念は「いのちの光」(ヨハネ8:12)であり、それは内面的(内実)です。つまり神のご計画とみどころ、みむねと目的にある「いのち」がどのようにして私たちにもたらされたのかを知ることが大切なのです。それは、三一の神が一連の贖いの出来事を通して、御父が御子を通して、その御子がいのちを与える御霊になることによって、神ご自身のいのちを私たちに分与されたという事実です。この神の事実に目を留めることが最も重要です。

● 「すべてのものが神から(ἐκ)発し、神によって(διὰ)成り、神に(εἰς)至るのです」(ローマ11:36)。原文は「神」ではなく、すべて「彼」です。「彼」をそれぞれ「御父」「御子」「御霊」と言い換えることができます。このことによって、三一の神にあるすべてのものが人に分与(共有)されるという神のご計画、これが「光」がもたらす概念であり、「いのちの光」が啓示しているものです。

今回のまとめ ③

【新改訳2017】コロサイ人への手紙1章13節

御父は、私たちが暗闇の力から救い出して、

愛する御子のご支配の中に移してくださいました。

(=愛する御子の王国のために、ともに立つ者としてくださった。)

※「移す」=「メスイステーミ」(μεθίστημι)=「ともに立つ」

● Hebrew 「渡らせる」(「アーヴァル」 אָרַב)の使役形。 אָרַבְתִּי =ヘブル人

人間中心のヘレニズムから神中心のヘブライズムへ

光を放つ = キリストとともに立つ